

## 藍野病院の新しい院長に佐藤茂秋先生を迎えて

この度、藍野病院院長として兵庫県立加古川病院前院長の佐藤茂秋先生が着任された。藍野病院を真の総合病院とするために、長らく努力を重ねられた近藤元治前院長の後をうけて、藍野病院を更に発展させるためにも、佐藤新院長に期待されるところが大きい。

それには理由があって、それは佐藤新院長が公衆衛生学、あるいは疫学を専門にしておられ、臨床に直接ふれられない院長であることがあげられる。21世紀に入り、超高齢化が急速に進み、疾病構造が大きく変遷する日本において、疾患の治療だけでなく疾患の予防が重要視されるようになり、厚生労働省も政策を医療から保健へ少しずつシフトする方向に変わり始めている。まさにそのような時期に、総合病院としての更なる発展を目指す藍野病院の院長として佐藤茂秋先生を迎えたことは、本当に意義のあることだと考えられる。

佐藤茂秋先生は、1965年3月東京大学医学部を卒業後、当時の東京大学医学部第三内科に入局された。内科学を専門とするためには生化学を勉強しておくのが良いとの上司の勧めもあって、1968年国立がんセンター研究所生化学部に勤務されるようになった。この頃から東京大学では医局紛争が始まり、先生は第三内科の医局に戻ることができなくなり、国立がんセンターに残って生化学の勉強を続けられた。1970年には東京大学医科学研究所の助手、更に米国のカリフォルニア大学サンディエゴ校に留学され、帰国後は再び国立がんセンター研究所に戻られた後、室長、生化学部長を務められた。1987年からは富山県衛生研究所長として、公衆衛生の研究業務に務められた後、1991年神戸大学医学部衛生学講座、後の分子疫学分野の教授になられ、公衆衛生の教育、研究にはげまれた。その後2003年4月より、兵庫県立加古川病院院長に就任され、多くの問題をかかえる公立病院の改革に日夜努力された。そしてこの度、藍野病院の院長として着任されたのである。

上に述べたように、佐藤茂秋先生は、臨床医学から始まり、基礎医学、特に生化学の豊富な経験をふまえて、社会医学、公衆衛生学へと発展され、最後に公立病院の院長として、病院管理の経験もつまれている。

先生はまじめで、率直で、誠実な教育者であり、研究者であり、管理者である。藍野病院という私立の病院の院長として、初めて経験されることも多い日々と思われるが、新しい空気を吹き込んでいただくためにも、これ迄務めてこられた公立病院での経験を率直に語っていただきたいとお願ひしていたところ、次に見られる様な貴重な特別寄稿を戴いた。先生には厚く御礼申し上げると共に、藍野病院での新たなご貢献を期待している。

藍野学院短期大学学長  
大澤 仲 昭